

國學院大學學術情報リポジトリ

『古事記』の絵本化についての考察：
黄泉国神話を対象に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鶉橋, 辰成 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001197

『古事記』の絵本化についての考察——黄泉国神話を対象に——

鶉橋 辰成

はじめに

現代に生きる人々にとって、『古事記』などの神話は、実際に作品を読むのではなく絵本や児童文学で触れることが多いだろう。幼少期の読み聞かせや小学校での神話・昔話の教材などがそれに相当する。平成二十年度に改訂された小学校の学習指導要領には「伝統的な言語文化に関する事項」が設けられ、低学年においては「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」とあり、平成二十九年改訂の学習指導要領でも「昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと」と記されている^①。『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 国語編』には、神話・伝承は「古事記、日本書紀、風土記などに描かれたものや、地域に伝わる伝説などが教材」であり、「児童の発達の段階や初めて古典を学習することを考慮し、

易しく書き換えたものを取り上げることが必要」としている。³このように、近年では小学校の国語の授業で『古事記』などの神話・伝説を学ぶことが求められている。しかし、国語の教科書には特定の神話しか掲載されていないため、それ以外の神話を学ぶ場合には、絵本などが有益となってくるだろう。一方で神話の中には性的な描写や生と死をテーマとするものなど子ども向けにしづらい神話もある。その中でも、黄泉国神話などは生と死の神話であることから、子ども向けに書き換える際には表現に工夫がされている。このような現代における絵本の特徴を確認することで、どのように『古事記』が捉えられているのかを考えることができるだろう。

そこで、『古事記』を絵本化した作品から黄泉国神話をとりあげたものを中心に、現代の『古事記』の受容を検討していきたい。黄泉国は、一般的に死者の国と認識されるように、『古事記』の世界観に関わる国であり、その国への訪問は、イザナキが禊ぎを行う要因になる。そして、禊ぎでは、高天原の主神であるアマテラスや、ヤマタノオロチ退治で有名なスサノオら三貴子が出現することから、その要因となる黄泉国神話は『古事記』の中でも重要な神話といえる。

本稿では、『日本の神話―くにのはじまり』（以下、あかね書房版）、『黄泉のくに』（以下、ポプラ社版）、『日本の神話古事記えほん―国生みのはなし―イザナキとイザナミ』（以下、小学館版）の三冊を対象に、黄泉国神話を考察する。

あかね書房版は舟崎克彦が本文、赤羽末吉が絵を担当する、一九九五（平成七）年の出版（一九八七年にトモ企画で刊行された物の再版）であり、平成初期（ないし昭和期末）に刊行された絵本である。日本の神話として『古事記』上巻を絵本化したシリーズの一冊であり、「数度の現地取材と資料調査を踏まえ、考証を尽したうえで、はばたく想像力によって描いた本格的な日本の神話」と紹介されている。⁴この巻では天地初発から禊ぎまでの内容が描かれて

おり、その対象年齢は五歳からとしている^⑤。

ポプラ社版は二〇〇三（平成十五）年の出版であり、平成十年代に刊行された絵本である。「日本の物語」シリーズの一冊で対象年齢を六歳とするが、このシリーズは「時代を越えて愛され親しまれてきた日本の代表的な物語をすぐれた文と絵によって現代によりがえらせ、子どもはもとよりおとなにもアプローチしたシリーズ」と紹介されているように、児童だけではなく幅広い年齢層に向けて作られた本である。この巻は児童文学作家の西本鶏介が監修、谷真介が本文、赤坂三好が絵を担当しており、内容は『古事記』の天地初発から禊ぎ神話を描いている。

小学館版は二〇一六（平成二十八）年の出版で、平成二十年代の刊行である。絵本のカバー裏には、「語りつがれてきた日本の神話「古事記」絵本の決定版!」と紹介されており、『古事記』の大国主神の国作りまでを絵本とするシリーズの一冊である。『古事記』研究者で『口語訳 古事記』の著者としても知られる三浦佑之が監修、萩原規子が本文、斎藤隆夫が絵を担当し、第一巻は、天地初発から禊ぎまでの神話を描いている。

以上のように、これらは黄泉国神話を含む天地初発から禊ぎまでの内容を記すものであり、平成期に刊行された子ども向けの絵本で、かつシリーズ作品であることから、現代の『古事記』の絵本化を探ることに適していると考えられる。なお、本稿は絵本の優劣を論じるものではないことは、あらかじめ明記しておく。

さて、『古事記』の記述では黄泉国そのものをはじめとして解釈の余地が多い箇所が多く、先行研究においても諸説でも様々に論じられている。そこで、まず、各絵本で黄泉国がどのように描かれているのかを確認し、絵本化の特徴をみていきたい。

一、黄泉国についての検討

当該神話の舞台となる黄泉国は、火神を生んだイザナミが神避つた国である。神話の最後に、葦原中国（地上世界）につながる黄泉比良坂について「故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ」とあることから、出雲国につながるりのある国とは捉えられるが、どこに位置する国なのかといった黄泉国そのものに関する情報は『古事記』では描写がない。⁽⁸⁾

是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ行きき。爾くして、殿より戸を牒ぢて出で向へし時に、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。爾くして、伊耶那美命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来坐せる事、恐きが故に、還らむと欲ふ。且つ黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と、如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。

（上巻・黄泉の国）

右のように、『古事記』では、イザナキがイザナミを追つて黄泉国に赴き、到着したところから神話が始まり、再会した二神が御殿の戸を挟んで言葉を交わし合う。傍線部のように、追つていったとあるのみで黄泉国に至る道中の記述がなく、その国がどこにあるのかは『古事記』本文では明らかにされていない。黄泉国の位置に関して、漢籍の「黄泉」が地下の冥界を指すことなどから、黄泉国は地下にある世界と捉えられているが、近年では山中他界と結びつける向きもあり、舞台となる黄泉国の捉え方には諸説ある。

まず、黄泉国の位置を各絵本の本文から確認すると、「地の底の死者の国」（あかね書房版）、「まっくらな地の底」

にある「死者のすむ」国（ポプラ社版）、「死者の行く」「暗い地下の国」（小学館版）と記されており、それぞれ地下に位置する死者の国として捉えている。そのため、三冊ともに、黄泉国は地下の冥界という位置づけをしていることが窺える。

また、先掲した『古事記』本文の波線部に記されている黄泉国の御殿とその戸についても詳細な記述はなく、絵本化にあたってどのように描写するかが問題になる。あかね書房版は、**図1**の挿絵のように、洞窟の中に黄泉があら。本文には「伊邪那岐はおそろしさもわすれてくたってゆくとやがてひえびえとした石のとびらにたどりついた」と記されており、イザナキは石の扉にたどり着き、その向こう側にいるイザナミに呼びかけている。同書の折り返み付録によると、作者は猪目洞窟の取材旅行に赴いたと記されている^⑨。猪目洞窟は黄泉国と関係する場所であり、『出雲国風土記』出雲郡の記事に、宇賀郷の北西に「窟戸」（岩窟）があり、「夢に此処の磯の窟の辺に至らば必ず死ぬ。故れ、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂・黄泉の穴と号く」と記されており、この「窟戸」が猪目洞窟に比定されている^⑩。これらのことを考慮すると、あかね書房版では猪目洞窟を参考に、黄泉国へ続く道を洞窟として描いているのだろう。そのため、ここでは御殿を描かず、石の扉を葦原中国と黄泉国の境界、つまり黄泉国の入り口として捉えていることになる。

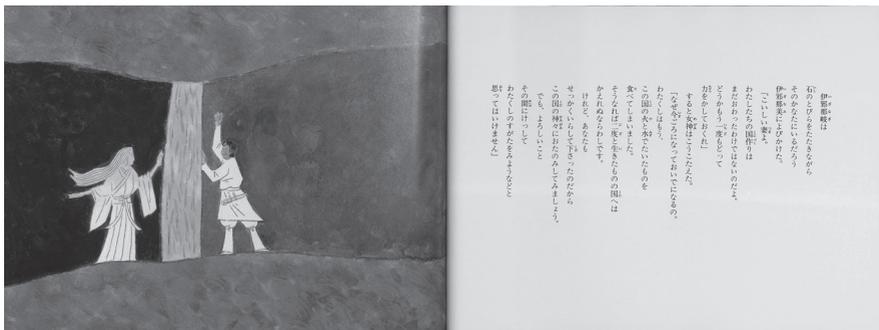


図1 あかね書房版 挿絵

『古事記全註釈』は、黄泉国神話は「横穴式古墳が神話説明の基礎」にあり、御殿の戸は「古墳の入り口を鎖した蓋石に基づいた表現」ではないかと説いており、あかね書房版の石の扉は、横穴式古墳の入り口を鎖す蓋石の印象と合致している。したがって、あかね書房版では、黄泉国は横穴式古墳に関連するという解釈に基づいて表現されているといえる。

次にポプラ社版では、本文に「黄泉のくへの入り口である 黄泉比良坂のどうくつ」を下るとあり、ここでは黄泉国への道は黄泉比良坂の洞窟とされる。先に確認したように、『古事記』本文には黄泉比良坂が洞窟であるという記述はない。そのため、ポプラ社版も、『出雲国風土記』の「黄泉の坂」「黄泉の穴」、およびその比定地とされる猪目洞窟との関係などを踏まえ、黄泉比良坂を洞窟として捉えたのであろう。また、本文に、イザナキが「氷のようにつめたい石の引き戸」に至り、それが「黄泉のくへのごてんの入り口」と記されている。挿絵には大きな岩のような外観の御殿に戸が描かれていることから、石で造られた御殿・戸と捉えていると思われる。『古事記 上代歌謡』が、御殿の戸について「古墳ならば羨道の入口をとぎす石の戸、殯ならば喪屋の入口の戸」と指摘しているように、御殿の戸を石製と捉えるならば、ポプラ社版の御殿・戸は横穴式古墳のイメージに基づいて描写されていると見られる。小学館版は、 2 の挿絵のように、大きな岩で囲まれた坂を下ったところに、イザナミの御殿が描かれている。本文には「暗い地下の国へ下っていききました」としかないが、おそらく、挿絵に見える坂を下って、イザナキは黄泉国の御殿にたどり着いたのだらう。監修者の三浦佑之による『口語訳 古事記』では「黄泉の国のイメージは、横穴式の古墳における玄室（死者を収めた棺を安置する空間）と羨道（玄室に入る通路）から発想されているとみてよからう。また、死後の儀礼を行う殯宮（喪屋）でのさまも反映しているだらう」との指摘がある。¹⁴小学館版の坂は羨道のイメージを踏まえている可能性がある。また、黄泉国の御殿については本文には「イザナミが住むごてん」と

記されるのみであり、戸を含めてそれらの材質が何かは記されていない。しかし、挿絵ではイザナミの御殿は石製ではなく、木で建てられた御殿のように見受けられる。戸についても、挿絵からは御殿と同様に木製の戸と捉えられる。先の『古事記 上代歌謡』の指摘を踏まえると、もし、御殿・戸について横穴式古墳をもとにしているなら、石製の御殿・戸として描写していたと思われる。そのため、この黄泉国の御殿・戸は殯宮（喪屋）をイメージしての描写であろう。

以上のように、黄泉国の位置は各絵本ともに地下とするが、黄泉国の御殿・戸については描写が異なる。あかね書房版では、『出雲国風土記』の記述や猪目洞窟を参考に洞窟を通過して黄泉国へ赴き、石の扉に至る。これは、横穴式古墳の入り口を鎖す蓋石の印象と合致しており、黄泉国は横穴式古墳に関連するという解釈に基づいている。ポプラ社版も洞窟を通過して黄泉国へ赴くが、石製の御殿・戸にたどり着くとされている。横穴式古墳のイメージに基づき、黄泉国の御殿・戸を描写しているといえる。小学館版は、大きな岩で囲まれた坂を下り、御殿にたどり着くが、殯宮（喪屋）をイメージしての描写と考えられる。



図2 小学館版 挿絵

二、黄泉国の住人についての検討

『古事記』において、神避ったイザナミは黄泉戸喫をしたことにより、黄泉国に所属する神となる。その際、イザナミの姿は異形のものに変質している。このイザナミの姿を見て恐れたことが、イザナキの逃走の契機となるため、これは黄泉国神話の展開を導く重要な要素である。『古事記』本文には、

うじたかれころろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。

(上巻・黄泉の国)

と、イザナミの体に蛆虫が集っていることが記されている。ただし、「ころろきて」については諸説あり、蛆虫がころろした音を立てる意と解する説⁽¹⁵⁾、蛆虫がワァーンとむせび鳴くさまを表すという説、ころろ転がり蠢くとする説⁽¹⁶⁾などがある。黄泉国のイザナミの姿は「うじたかれころろきて」という一文をどう解釈するかにより、表現が変わってくる。右の点について、各絵本の本文では次のように記されている。

(あかね書房版) ともしびの中に生前とはにてもつかぬ死んでくさりはてた伊邪那美が体のあちこちから生みおとした雷神にまもられているではないか。

(ポプラ社版) くさりかけているからだには、たくさんの虫がわいて、うごめいていました。頭や胸、おなか

などには、死んだ イザナミノミコトのからだからうまれた八人のぶきみな、みにくい顔をした雷神たちが、まとわりついています。なにがうれしいのか、足からうまれた雷神は、びよんびよん はねていました。目をおおいたくなるような、光景です。

(小学館版)

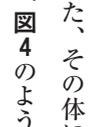
くしの火が照らし出したのは、うじ虫が全身にたかり、むらがつてうごめく、イザナミの死体でした。くさった頭、手足、むねやはらから、すさまじい雷の神がみが生まれ出ています。なんとという変わりはてすがたでしょう。

あかね書房版の本文では、イザナミを「生前とはにてもにつかぬ死んでくさりはてた」姿と、腐乱死体であることを記すのみである。挿絵でも、**図3**のように、イザナミの全身は黒ずみ、横たわっている姿で描かれており、蛆虫が描かれているかは判然としない。⁽¹⁸⁾『古事記』本文では、蛆虫が集る様子からイザナミの体の状態(腐敗)を連想させるが、あかね書房版はイザナミの体が腐っているという点に重きを置いて表現している。

ポプラ社版では、本文に死んだイザナミの様子は「くさりかけているからだ」とあり、その体には「たくさんの虫がわいて、うごめいて」いるとも記されている。挿絵では、その顔は青白く通常の肌色をしておらず、ぼろぼろの衣服を纏って横たわった姿で描かれており、腐乱した姿が描写される。多くの虫が蠢くとするため、ポプラ社版は「うじたかれころろきて」の「ころろく」を蠢く意と解し、イザナミの体を腐りかけの体として表現している。

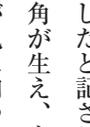


図3 あかね書房版 挿絵

小学館版では、イザナミは「うじ虫が全身にたかり、むらがつてうごめく」死体と本文に記されており、「うじたかれころろきて」を蛆虫が蠢くと解釈している。また、その体については、本文に「くさった頭、手足、むねやはら」と全身が腐っていることが示されており、挿絵では、4のように、落ちくぼんだイザナミの顔や手足には青くなっている部分が見られ、体に蛆虫が集っているイザナミの姿が描かれている。そのため、小学館版は、イザナミの体に蛆が集り蠢いていると解釈し、その体は腐った死体であると捉えている。

以上のように、黄泉国のイザナミについては、各絵本ともに死者（死体）であることが根底にあり、腐乱する体であると理解している。

さて、『古事記』本文には、イザナミの体の八箇所⁽¹⁸⁾に雷神が居ると記されている。この雷神は、後に逃走するイザナキの追っ手としても登場する神である。これについて、先行研究では「雷」の字から雷の神として解釈する説がある一方、『古事記注釈』のように「恐るべき魔もの」と捉え、その姿は「カミナリであるよりは鬼形のものに見える」とみる説もあり、雷神の意味や姿について異なる解釈がされている。

いずれの絵本でも、雷神はイザナミの体から誕生したと記されているが、描き方については差異がある。3でみたように、あかね書房版の挿絵には、雷神の頭には角が生え、赤い体に縞模様⁽¹⁹⁾の腰布のみを身に纏っている鬼の姿で描かれている。絵本の折り込み付録には「伊邪那岐が鬼に向って桃を投げる場面がある」と記されている。後に確認するように、桃を投げられるのは雷神であるから、作者は雷神＝鬼として捉えており、先の『古事記注釈』の指摘と合致している。そして、あかね書房版の本文には、イザナミはこの雷神によって「まもられている」とあることから、雷神はイザナミの守護者的存在として位置づけられていることになる。そのため、雷神はイザナミを守護する鬼という解釈になろう。

ポプラ社版では、本文において雷神の顔は「ぶきみな、みにくい顔」と形容され、挿絵には逆立った髪に赤い肌、尖った鼻・耳に鋭い歯をもち、虎柄の腰布のみを纏う鬼として描かれている。『古事記注釈』の「鬼形のものに見える」という解釈と重なるため、雷の神というよりは魔物のような存在として理解したのだろう。また、「足からうまれた雷神」が跳ね回り、「目をおおいたくなるような、光景」とも記されていることから、雷神の醜さに焦点が当てられているといえる。

小学館版では、図4のように、雷神はアフロヘアで大きな鼻に鋭い歯、赤や青、黒の肌をもつ異形であり、雷雲を纏った姿で描かれている。この雷神について、本文には「すさまじい雷の神がみ」と記されており、小学館版の巻末にある用語解説に、雷神は「人をおそれさせる力をもつもの。魔物の一種」と解説されているため、ここでは他者を恐怖させる力をもつ、凄まじい雷の神であり魔物と捉え、その強さを重視している。

このように、雷神については、あかね書房版はイザナミを守護する鬼、ポプラ社版は容姿の醜い鬼、小学館版では凄まじい力を持つ雷神であり魔物として表現されている。

また、黄泉国の住人として、ヨモツシコメも神話に登場する。このヨモツシコメは「死の穢れの擬人化」と解釈され、追っ手としてイザナキを追いかける。平安期編纂の『和名類聚抄』では、すでに「醜女（素言）、或説黄泉之鬼也」と解説されているように、鬼として捉える見方があり、またヨモツ



図4 小学館版 挿絵

シコメの「シコ」を「醜さ」と捉えるか、「頑強さ」と捉えるか、名の解釈も分かれている。

各絵本のヨモツシコメについて確認すると、あかね書房版の本文には「手下の女鬼」や「いやしい鬼」と記され、挿絵では頭に角が生え、赤い体に白い腰布のみを身に纏う鬼として描かれている。あかね書房版は『和名類聚抄』の指摘と合致しており、古来からの解釈を引き継いでヨモツシコメを黄泉国の鬼として描いていたのであろう。

次にポプラ社版では、本文に「たくさんのおに」や「女のおにたち」、「死者のくにのおにたち」と記されており、ヨモツシコメは鬼女として捉えられている。挿絵を見ると、その頭に角の生えた醜い顔、青白い体、赤と白の縞模様を着物を纏っている姿であり、ポプラ社版も『和名類聚抄』の指摘と合致している。また、この鬼（ヨモツシコメ）が「みにくい」と形容されているため、ポプラ社版はヨモツシコメの「シコ」を「醜さ」と捉えており、醜さを意識した鬼として描かれている。

また、小学館版においては、挿絵を見ると、ヨモツシコメは鋭い歯をもち、赤い体を白い腰布のみを纏う異様な姿で描かれているため、外見の醜い存在として描写されている。ただし、本文には、ヨモツシコメを「強くおそろしい女たち」と記している。『口語訳 古事記』では「醜女とは醜い女というより、パワフルな女のこと」と指摘されていることから、これは「シコ」の意を「頑強さ」と捉える説を踏まえて解釈されている。そのため、小学館版のヨモツシコメは、力強さに重点が置かれていると理解できる。

右のように見ると、雷神やヨモツシコメといったイザナキの追っ手については、あかね書房版は鬼、ポプラ社版は容姿の醜さ、小学館版は力の強さという点に焦点が当てて描写しているといえる。

三、イザナキの逃走の検討

前節で確認したように、イザナミは恐ろしい姿に変質しており、イザナキはその姿をみて逃げ帰る。この箇所については、後の昔話である三枚のお札に通じ、呪的逃走譚という話型として捉えられている。『古事記』本文には次のように記される。

是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見しめつ」といひて、即ち予母都志許売を遣して、追はしめき。爾くして、伊耶那岐命、黒き御縵を取りて投げ棄つるに、乃ち蒲生子りき。是を撫ひ食む間に、逃げ行きき。猶追ひき。亦、其の右の御みづらに刺せる湯津々間櫛を引き鬪きて投げ棄つるに、乃ち笋生りき。是を抜き食む間に、逃げ行きき。且、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾くして、御佩かしせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。爾くして、伊耶那岐命、桃子に告らさく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ち患へ惚む時に、助くべし」と、告らし、名を賜ひて意富加牟豆美命と号けき。

（上巻・黄泉の国）

イザナキは、イザナミの遣わしたヨモツシコメに追われ、縵・櫛などを投げ棄てることで「蒲子」や「笋」に変化させてその追跡を阻む。ただし、物の変化の様子やイザナキは逃げながらどのように投げ棄てたのかは記されておらず、絵本で描写する際には問題となるだろう。その後、雷神と黄泉軍が追っ手として差し向けられ、イザナキは剣を後ろ手に振りながら逃げ、黄泉比良坂の麓にたどり着いたときに、桃の実を用いて追っ手を撃退する。そして、その桃の実にオオカムツミと名付けるといふ展開になっている。この剣を後ろ向きに振ることについては、追ってくる

雷神と黄泉軍を逃げながら防ぐために剣を後ろ手に振るといふ指摘⁽²⁸⁾のほか、相手を困らせる呪術といふ指摘もある⁽²⁹⁾。また、「待ち撃ち」を『日本書紀』神代上・第五段・一書第九の「其の実を採りて雷に擲げたまひしかば、雷等皆退き走げぬ」といふ記述を考慮して投擲行為と捉えるか、新編日本古典文学全集『古事記』が「後で桃の実に名を与えているのだから、ただの物体とは違う。投げつけたりする物ではなく、桃が働き呪力を發揮して助けるのである」と指摘するように⁽³⁰⁾、桃の呪力の發揮の表現と捉える説もある。このように、イザナキの行為については解釈が分かれており、絵本にする際にどのように解釈するのかによつて表現が異なつてこよう。

この点について、あかね書房版本文は、次のように記す。「傍線は筆者が付した」

伊邪那岐はそれをふりはらうために髪につけていたつる草を鬼どもにむかつてなげつけた。つる草はまたたくまに道においしげると山ぶどうの実をみのらせた。いやしい鬼はそれを見るなり足をとめて果実にむしゃぶりついた。だが、山ぶどうを食いつくと鬼たちはまたも追いつがってくる。そこで伊邪那岐は櫛をぬくとその齒を引き折つてはなげつけたのである。すると櫛の齒は地面におちるなり筥にすがたをかえた。鬼たちはそれに目をうばわれると役目もわすれてくらくらくのであった(中略)伊邪那岐はその時、やつとのことで死者の国の出入口――黄泉比良坂のふもとに來たところだった。すると、そこに一本の桃の木がはえている。思わずその実をいくつかもぎ、雷神めがけてなげつけると、雷神たちはおそれをなしてちりぢりになつてしまつた。

縷・櫛については、イザナキの縷、つまり髪につけている蔓草が生い茂り、山葡萄の実をつけ、また、櫛の齒が地面に落ちたときに筥に変じたと記されている。「類似呪術に基づいた話」と指摘されているように⁽³¹⁾、縷・櫛の材料や形状、また変化後の物との関連性を考慮し、物の変化の様子を記していると見られる。

イザナキの行為を見ると、あかね書房版の本文には、縷や櫛をヨモツシコメに向かつて「なげつけ」、雷神と千五百人

の兵（黄泉軍）に桃の実を「なげつけ」たと記されている。『古事記』本文では、前者は「投げ棄つる」、後者は「待ち撃ち」と書き分けられている行為であるが、あかね書房版では同様の投擲行為として表現していることになる。また、イザナキが剣を後ろ向きに振りながら逃げることに、および桃の実にオホカムツミと名づけることについては、絵本の本文に記述がない。なお、あかね書房版の挿絵を見ると、**図5**のように雷神と千五百人の兵（黄泉軍）の追跡に対して、イザナキは桃の実を取って雷神に投げつけて撃退している。『古事記』では「桃子を三箇取りて」と桃の実の数は決まっているが、あかね書房版の本文には「いくつか」と記され、挿絵では五つ投げている様子が描かれている。『古事記』に記載されている剣や名づけなどの他の行為の省略や桃の実の数が『古事記』と異なることから、あかね書房版では、イザナキの行為については追っ手に物を「なげつけ」て逃げるという点を重視して構成を整えている。

ポプラ社版では、同じ場面を次のように記している。（傍線は筆者が付した）

イザナギノミコトは 髪をおさえている つる草の根をとって、なげつけました。 つる草の根は ばらばらになると、またたくまに 野ぶどうのつるにかわり、たくさんの実がなりました。おにたちはおなかをすかしていたのか、その 野ぶどうの実をもぎとって、がつがつ

たべはじめました。そのすきに、イザナギノミコトは にげましたが、野ぶどうの実をたべつくすと、おに

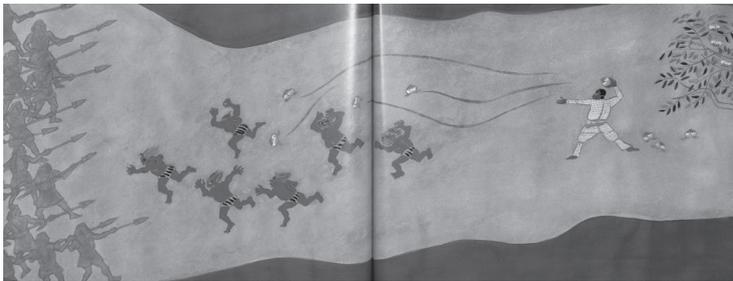


図5 あかね書房版 挿絵

たちは また、きみのわるい声をあげながら、おつてきました。こんどは くしを手にして、はを 一本一本 おりながら、なげつけました。くしのはは 地面におちると、またたくまに たけのこになって、よきによき はえだしました。おにたちは たけのこをひきぬくと、また、がつがつ たべはじめました(中略) ものたちは きみような声をはりあげて、せなかや頭にとびつき、足にまわりついてきます。イザナギノミコトは、腰のつるぎをぬきました。そして、とりつき まとわりついてくる 死者のくにのまものたちを、なできり ふりはらいながら、やっと黄泉のくにの出入り口である、黄泉比良坂にたどりつきました。どうくつの入り口に、大きな実が たくさんなっている ももの木がありました。イザナギノミコトは、かおりのいい その実を三つすばやくもぎとると、おつてくる雷神やまものたちに なげつけました。すると、雷神たちは、「ゲ、ベベベベ——」と、おびえるような声をあげて、たちまち すがたをけしてしまいました。イザナギノミコトは、ほおつと いきをはいてから、かたわらの ももの木にいました。「おまえは、わたしをすくってくれた。ありがとう。これからも、わたしをたすけたように、くるしいめにあっているひとたちがいたら、その実でたすけてやっておくれ」そういって、ももの木にオオカムズミノミコトという名をつけてやりました。邪気をはらう霊力がある神という意味です。

ポプラ社版の本文では、縷を蔓草の根と捉え、それがバラバラになり、野葡萄の蔓に変わって多くの実をつけ、櫛の歯が地面に落ちたときに筍に変化して生えたとしており、材料や形状および変化後の物との関係から、縷や櫛の變化の様子が記しているのであろう。

イザナキの行為について、本文には、ヨモツシコメに縷や櫛の「なげつけ」、纏わり付いてきた死者の国の魔物を「なできり ふりはらい」、雷神等に桃の実三つを「なげつけ」、そして、その桃に「名をつけ」たと記されており、

『古事記』が記すイザナキの行為を全て描写している。このうち、「投げ棄つる」「待ち撃ち」にあたる縷・櫛、桃の実については、ポプラ社版も追っ手に向かつてに「なげつける」行為とされており、同様の投擲行為として理解していることが窺える。また、剣を後ろ向きに振ることについては、実際に剣で追っ手を切ると捉えられており、より直接的な攻撃行為であると理解されている。そして、追っ手撃退後の桃への名づけについては、名づけたオオカムズミの名義を「邪気をはらう霊力がある神」と神名の解釈を補足し、邪鬼を祓うという桃の呪力を想起させるように記している。なお、『古事記』本文では桃の実に対して行われるが、ポプラ社版の本文には桃の木に対して名づけたと記されている。これは、もぎ取った桃の実を投げつけたと捉えたからと思われるが、もともとの中国での思想では桃の木が対象であったことも関係しているだろう。^②そのため、ポプラ社版も、イザナキの「投げ棄つる」と「待ち撃ち」を「なげつける」行為と捉えるが、『古事記』に記される他の行為も描いている。

小学館版では、次のように記している。「傍線は筆者が付した」

イザナキは、頭にまいて髪かざりにしていたつる草をはずすと、うしろに投げすてました。すると、つる草はたちまち大きなしげみに変わり、おいしそうな山ぶどうがどっさり実りました。ヨモツシコメはこれを見のがせず、ぶどうの実をつんで食べることに夢中になりました。そのすきに、イザナキはにげのびました。しかし、すぐにぶどうを食べつくしたヨモツシコメは、またもやイザナキにぐんぐんせまります。あぶなくなつたイザナキは、右の角髪のかしをぬき、齒を折つてうしろに投げすてました。すると、おいしそうな竹の子がたくさん生えてきました。ヨモツシコメはこれを見のがせず、竹の子をぬき取ってかじりつき、夢中になりました。イザナキは今度もにげのびました（中略）イザナキもこしのつるぎをぬき、うしろ手にふりまわしながらにげつづけました。そして、ようやく、地上とのさかいにある、黄泉つ比良坂のふもとにたどりつきます。ふもとには、ももの木が

生えていました。イザナキが、ももの実をもぎ取って、次つぎに三つ投げつけると、追ってきたすべての者が、たちまちにげもどってしまいました。イザナキは、ももの実をたたえて言いました。「わたしを助けてくれたように、地上の人びとが苦しい目におちいってなやむときは、いつでもおまえが助けてくれ。」このももには、特別にオオカムズミと名をあたえました。

小学館版の本文には、縷は髪飾りや蔓草と捉え、それが大きな繁みに変化して山葡萄が実るとし、また櫛（あるいは地面）からは筍が生えてきたと記しており、縷・櫛の材料や形状を考えて物の変化の様子を表現している。

そして、小学館版おけるイザナキの行為をみると、本文には縷や櫛は「うしろに投げすて」、剣を「うしろ手にふりまわし」、桃の実三つを「投げつけ」、最後に桃に「名をあたえ」と記されている。縷や櫛は後ろに投げ棄てたことから、ヨモツシコメに向かつて投げつけたのではなく、その進路上に投棄するという解釈とみられる。また、剣を後ろ手に振ることに關しては、挿絵では描かれておらず、本文でも「ふりまわしながらにげつづけました」とあるのみでどのような解釈をしたのか明確には読み取れないが、これについては『口語訳 古事記』に「後ろ手で何かをするのは、呪詛などマジカルな所作であるが、この場合は、追いかけているので、その敵から逃れようとして、必死に剣を振り

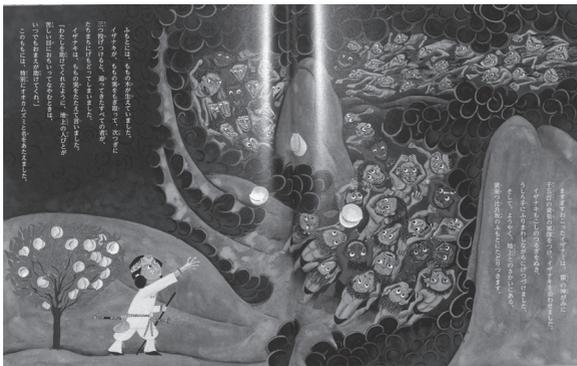


図6 小学館版 挿絵

ながら逃げている場面」と指摘されているように捉えたものだろう。桃の実に関しては、本文に、イザナキが実を三つ投げつけたと記されることから、これは縷や櫛を投げ棄てるのとは別の行為として捉えていることになろう。また、桃に対する名づけは、実に対してと記されており、ここは『古事記』の記述通りに解釈している。このうち、桃の実の投擲については、**図6**の挿絵のように迫り来る追っ手を退かせており、先に述べた『日本書紀』神代上・第五段・一書第九と一致するものである。『古事記』の記述に基づきながらも、解釈が難しい部分については『日本書紀』の記述を反映させるなどして理解しやすくしているのである。

以上のように、縷・櫛の変化の過程のように、『古事記』には記述がない点については、それぞれの絵本で説明を補い、読み手の理解を促す配慮をしつつ、神話を展開させている。

また、あかね書房版の本文ではイザナキが物を追っ手に投げつけて逃げるという展開に整理して描写し、ポプラ社版も縷・櫛、桃の実に関しては同じように整えつつも、剣や桃への名付けなど、『古事記』本文に記される行為を全て描写している。小学館版の本文では、『古事記』の語句の差異に基づいて異なる行為と解釈した上で、イザナキの逃走が捉えられている。そして、各絵本ではそれらの本文に基づいた挿絵によって、どのように逃走の様子を解釈したのか、読み手の理解を促すように描かれている。

おわりに

ここまで、黄泉国とその黄泉国の住人、そしてイザナキの逃走という黄泉国神話を読む上で重要な部分に焦点を当て、三冊の絵本が描く神話の解釈を確認してきた。

黄泉国は、三冊とも地下に位置する死者の国として描いている。しかし、黄泉国の御殿・戸については描写が異なっていた。あかね書房版では、『出雲国風土記』の記述や猪目洞窟を参考に、『古事記』本文にない黄泉国への通り道を洞窟とし、石の扉に至るとする。この扉は、横穴式古墳の入り口を鎖す蓋石の印象と合致しており、黄泉国は横穴式古墳に関連するという解釈に基づいている。ポプラ社版も洞窟を通して黄泉国へ赴き、石製の御殿・戸にたどり着くとあるため、横穴式古墳のイメージに基づき、黄泉国の御殿・戸を描写しているといえる。小学館版は、大きな岩で囲まれた坂を下り、御殿にたどり着くが、ここでは御殿・戸が石製ではないため、殯宮（喪屋）をもとに描写したと見られる。

また、黄泉国のイザナミについては、各絵本ともに死者（死体）であることが根底にあり、腐乱する体であると理解しているが、あかね書房版はイザナミの体が腐っているという点に重きを置いて表現している。ポプラ社版は「うじたかれころろきて」を多くの虫が蠢く意と解し、イザナミの体を腐りかけの体と表現している。小学館版は、イザナミの体に蛆が集り蠢いていると解釈し、その体が腐った死体であると捉えたのであろう。

また、イザナミの体に居る雷神については、いずれの絵本でも、イザナミの体から誕生したとするが、あかね書房版はイザナミを守護する鬼とし、ポプラ社版は不気味な容姿の鬼でその醜さを重視して描写している。小学館版では他者を恐怖させる力をもつ凄まじい雷の神であり魔物と捉え、その強さに重きが置かれている。さらに、ヨモツシコメについては、あかね書房版は鬼女、ポプラ社版も鬼女だが醜さが重要視されている。小学館版は強く恐ろしい女と捉えている。そのため、雷神・ヨモツシコメについては、あかね書房版は鬼、ポプラ社版は容姿の醜い鬼、小学館版は黄泉国の強い存在という点に焦点を当てているといえる。

そして、イザナキの逃走については、三冊とも投げた物の変化の様子を記したりと、『古事記』本文からは読み

取れない部分を補い、あかね書房版ではイザナキが物を相手に投げつけて逃走するという構成に整え、イザナキの逃走の様子を捉えやすく表現している。ポプラ社版もイザナキが物を相手に投げつけて逃走するというように構成を整えているが、『古事記』の記述にある剣や桃への名付けなど、『古事記』本文の流れを意識して描いている。小学館版は基本的に『古事記』本文の語句の差異を意識し、それぞれの行為は別ものと捉えた上で描写している。

以上のことから、あかね書房版は、境界として分かりやすい石の扉、追っ手の鬼、そして、物を投げつけて逃走するというように、黄泉国神話の核となる要素を抜き出し、神話を分かりやすく構成しようとしている。ポプラ社版は、追っ手の醜い鬼や、物を投げつけて逃走するなど、神話を理解しやすいように整えている一方、御殿や戸、剣の描写や桃の名付けなど『古事記』本文に記載されていることを意識している。小学館版は、語句の差異など『古事記』の記述を意識し、理解しづらい箇所については他文献などを参考に、読み手が捉えやすくなるように描写されている。

このような各絵本の特徴は、内容の読みやすさ、『古事記』本文との合致など、どの点に比重を置くかによって、その描き方が変わってくる。そして、『古事記』本文は様々に解釈されることもあり、絵本化されるにあたっては他文献や先行研究を踏まえるなど、編者・作者の立場によって構成が異なっていた。そして、それが各絵本の特徴ともなっている。

前提として、これらの絵本は子ども向けに『古事記』の神話を伝えるものである。そのため、いずれもが読み手の理解を促すよう工夫されている。冒頭で触れたように、小学校での神話・伝説の学習が謳われる時代にあって、これらの絵本をきっかけとして『古事記』の神話を学ぶこともできるであろう。したがって、絵本もまた現代における『古事記』受容の一端を担っているのである。

引用文献

- ・舟崎克彦（文）・赤羽末吉（絵）『日本の神話一 くにははじまり』（あかね書房、一九九五年十月）。
- ・西本鶏介（監修）・谷真介（文）・赤坂三好（絵）『黄泉のくに』（日本の物語絵本四、ポプラ社、二〇〇三年十月）。
- ・三浦佑之（監修）・荻原規子（文）・斎藤隆夫（絵）『日本の神話古事記えほん一 国生みのはなし〜イザナキとイザナミ〜』（小学館、二〇一六年四月）。

註

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領』（平成二十年三月）は、文部科学省ホームページより引用。〈https://www.next.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm〉（令和二年十一月三日閲覧）。
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）』（二〇一七年三月）。
- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 国語編』（二〇一七年七月）。
- (4) あかね書房『日本の神話【全6巻】』（<https://www.akameshobo.co.jp/search/info.php?isbn=9784251902061>）（二〇一三年一月十二日閲覧）。
- (5) あかね書房『くにははじまり（日本の神話①）』（<https://www.akameshobo.co.jp/search/info.php?isbn=9784251008213>）（二〇一二年七月二十八日閲覧）。
- (6) ポプラ社『黄泉のくに 日本の物語絵本四』（<https://www.poplar.co.jp/book/search/result/archive/3011004>）。

- html) (二〇二二年七月二十八日閲覧)。
- (7) ポプラ社「日本の物語絵本(全二十巻)」〈<https://www.poplar.co.jp/book/search/result/archive/3011.03.html>〉(二〇二三年一月十二日閲覧)。
- (8) 『古事記』訓読文の引用は、山口佳紀・神野志隆光『古事記』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年六月)に拠る。
- (9) 舟崎克彦(文)・赤羽末吉(絵)『くにははじまり』折込付録(あかね書房、一九九五年十月)。
- (10) 「風土記」訓読文の引用は、植垣節也『風土記』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年十月)に拠る。
- (11) 前掲注(10)。なお、同注釈書によると、「窟戸」は水垂の磯の洞窟とする説もあるという。
- (12) 倉野憲司『古事記全註釈』第二卷(三省堂、一九七四年八月)。
- (13) 荻原浅男・鴻巣隼雄『古事記 上代歌謡』(日本古典文学全集、小学館、一九七三年十一月)。
- (14) 三浦佑之『口語訳 古事記「完全版」』(文藝春秋、二〇〇三年一月)。
- (15) 前掲注(13)。
- (16) 西郷信綱『古事記注釈』第一卷(ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇五年五月・初出一九七五年一月)。
- (17) 前掲注(8)。
- (18) ただし、黄泉比良坂でイザナキに追いついた場面では、イザナミは全身が白く幽鬼的な姿で描かれている。
- (19) 前掲注(16)。
- (20) イザナミの体からの出現の他に、中村啓信『新版古事記』(角川文庫、角川学芸出版、二〇二二年十一月)などは、八雷神は黄泉国に発生したと指摘している。

- (21) 前掲注(9)。
- (22) 三浦佑之(監修)・荻原規子(文)・斎藤隆夫(絵)『国生みのはなし(イザナキとイザナミ)』(日本の神話古事記えほん一、小学館、二〇一六年四月)。
- (23) 倉野憲司『古事記 祝詞』(日本古典文学大系、岩波書店、一九五八年六月)。
- (24) 真福寺本『和名類聚抄』卷一(馬淵和夫『古写本和名類聚抄集成 第二部 十卷本系古写本の影印対照』勉誠社、二〇一六年八月)。
- (25) 本居宣長『古事記伝』(『本居宣長全集』第九卷、筑摩書房、一九六八年七月)。
- (26) 前掲注(13)。
- (27) 前掲注(14)。
- (28) 前掲注(16)。
- (29) 西宮一民校注『古事記』(新潮日本古典集成、新潮社、一九七九年六月)。
- (30) 前掲注(17)。
- (31) 前掲注(23)。
- (32) 西郷信綱『古事記注釈』第一卷(ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇〇五年五月・初出一九七五年一月)は、「中国では古くから桃は邪鬼をはらう仙木とされていた(中略)古事記の話は桃の木でなく桃の実にかかわっているけれど、同義と見てよかろう」と指摘している。
- (33) 前掲注(14)。

謝辞

本稿の執筆にあたり、あかね書房、ポプラ社、小学館には絵本の本文・挿絵、または本文の引用をご承諾いただいた。この場を借りて深く感謝申し上げます。